



TITLE:

大学改革にさいし図書館にのぞむ -  
“利用者の声”特集号(その1) -

AUTHOR(S):

犬伏, 康夫

---

CITATION:

犬伏, 康夫. 大学改革にさいし図書館にのぞむ - “利用者の声”特集号(その1) -. 静脩 1970, 7(3): 1-2

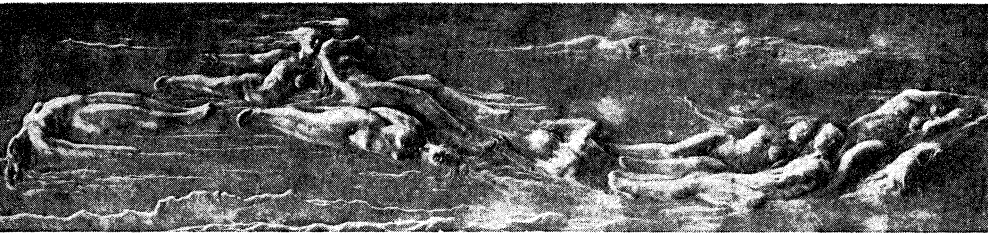
ISSUE DATE:

1970-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36599>

RIGHT:



## 大学改革にさいし図書館にのぞむ

——“利用者の声”特集号（その一）——

### はじめに

奉仕機関である図書館は、つねに“利用者の声”をきく姿勢が必要ですが、このことは現在とくに大切であると思われます。附属図書館事務部から全学のライブラリ・システムについての試案が出されている折柄“利用者の声”の特集をいたしました。

本号に寄せられた利用者各位のご意見にはふかく耳を傾け、今後図書館の改革を考えていくときの参考にさせていただきたいと存じます。

薬学部 教授 犬伏康夫

“大学改革に際し図書館にのぞむ”というテーマで利用者の声をということなので思いついたことを二、三記します。図書館の改善あるいは改革を考える場合、1) その意図と目的 2) それを実現するための機構 3) その結果はどうなったか、特に利用者にとって便利になったかどうかを含めての検討という過程をへることになるだろう。

ところで利用者は特別の人を除いてその関心は 3) に向けられるであろう。2) については余り関心はなく、たとえあってもなかなかそこまで考える時間的余裕をもたないというのが実情で、また当然のことかもしれない。こういった点から案が利用者の立場をどのように理解し、考慮に入れているかがもっとも重要な点であろう。

図書の利用は大きく分けて文献の入手と文献の検索ということになるが、第一の文献の入手については京大という単位で考えてもなお問題が残されている。学内相互利用ということで原則としてどこにあっても利用できるが、そのためには利用者がいちいち借用書をもってゆかなければならない、あるいは複写の設備はどこにもあるのに機構上の問題で借り出した上で自分の学部でコピーしなければならないとか、図書館全体の問題からすると小さな問題かもしれないが利用者にとっては身近かなところに問題がある。

第二の文献の検索は、学内的な所在調査ということでは問題はないが、将来を考えると多くの問題があろう。たとえば現在のように情報が増加してくると、とても手では探しきれないという事態が目前に迫っていることは確かであろう。こうなると文献の探索にもコンピューターの導入が必至になるだろう。したがって、こうなると必然的に今までなかったような全学的な図書館組織が要求されると思われるが、このような事態にどのように対処してゆくか考慮されるべきであろう。利用者にしてみれば日常の図書業務の機械化もさることながら、本来の文献探索のための機械化がどのように図書館組織に影響を与え、どのように機械

化されるかにもっとも大きな関心をもつものである。

はじめに記したように改善、改革を考える場合の 1) → 2) → 3) の方向への過程と、一方利用者の 3) → 2) の方向への過程がうまくみ合い、利用者のもっている細かい問題、あるいは近い将来当面するであろう問題の解決に案がどうとりくむかにもっとも注目する。ライブラリー・システムとごく日常的な小さな実質的な問題のひとつひとつの結びつきとそれがどのように解決されるかの検討がこれからの大きな問題ではなかろうか。

#### 工学部 教授 金 多 潔

大学の改革は、いろいろな問題について、あらゆる角度から慎重な検討が加えられつつあって、やがて新しい具体的な形に落ち着くことであろう。その結果が漸定的に、あるいはまた最終的にどのような姿になって現われてくるかということは筆者には予測もつかないけれども、問題を図書館のみにしぼって見てもそこには沢山の課題が山積して行くように思われる。

自然科学、社会科学、人文科学のどの分野がとくに多いかは明らかではないが、わが京大図書館に1年間に受け入れられる蔵書だけでも10万冊を超え、その比率が年々高まって行く傾向にあるのであって、このままで過せば遠からずして、いやすでに、書庫のスペースは一杯に満たされてしまうことは自明である。

その傾向は本部図書館の分室ともいうべき私どもの教室図書館においてはより深刻なものとなっている。当初は研究室とか教官室にする心算で建設された教室の一角が書庫に使われ、蔵書で満たされて、段々とスペースを膨張させざるを得なくなっている。このために教室ではもともと狭い教室の各種スペースをやりくりしている訳であるが、いつも漸定的であって、恒久的な名案は見付かってはいない。

古い本は古きがゆえに、また一般に得難いがゆえに簡単に処分してしまう訳にはゆかない。反面、最新の知識を盛り込んだ新刊書は多くの研究者・学生から強い要望のあるところである。これらを保持し管理する図書館はただ今までと同様な形で膨張し続けなければならないものだろうか？ 情報過多といって片づけてしまわないで、この単調な膨張を何とか防ぐ方法・手段を大学改革に伴う技術的な問題の一つとして多くの人々に考えてもらいたいものである。

別の話になるが、教室の図書室の利用者の中には図書室の利用規定や貸出規定を守らないで迷惑をかけているものも少なくない。期限内に返却すべき本を長期にわたって借りたまま、図書室係員からの督促にも応じないものもあると聞く。このようなモラルの低さではとても大学改革どころの次元ではなく、図書館に何かを望む以前に先ずわれわれ利用者の衿も正さなくてはならないと思うのである。

#### 医学部 4回生 中 尾 紀 子

医学部では図書館の本はだれでも同じように利用できるもので、医学部の図書館を利用する手続きに不便を感じたことはありません。しかし、教科書類がどんどん古くなっていくためか、本の冊数ほど内容は揃っていないと思います。また内科、外科など各科の間で充実度にむらがあるのではないかと感じています。各科の専門書は各教室の図書室の方が充実しており、また個人の蔵書が充実しているという友達もあります。私も含めて、図書館の意義を認識する必要があると思います。

図書館が利用しにくい理由として、医学部図書館は9時から5時まで開館していますが、